

プロジェクト研究

「市博物館と地域と市立大学との連携による街づくり」

名古屋市立大学大学院人間文化研究科

（さかい・よしき）
阪井芳貴

一・構成

阪井芳貴（人間文化研究所長）を研究代表者とし、同研究所所員（安藤究、谷口幸代）、ならびに吉田一彦（人間文化研究科教授）、水野みか子（芸術工学研究科）の五名。

二・活動内容

名古屋市博物館との連携プログラムの一環として、一・ナイトミュージアム、二・ワークショップでござる、三・公開講演会・シンポジウムを共催。なお、ワークショップは九州国立博物館との共催でもあった。

二〇一一年度名古屋市立大学特別奨励研究費プロジェクトにも採用。

(一) ナイトミュージアム

日時：二〇一一年八月六日（土）、七日（日）午後五時半～九時半

会場：名古屋市博物館

名古屋市博物館、瑞穂通商店街振興組合、博物館地域連合子ども会、株式会社名古屋グランパスエイト、名古屋市瑞穂図書館が共催する「はくぶつかんまつり」の企画「ナイトミュージアム」に

参加。研究代表者が指導する人文社会学部専門科目「社会調査実習」を履修する学生九名を中心に、延べ約一〇〇名の学生ボランティアが、市博物館の学芸員の助言を受けながら企画、準備段階から当日の運営まで関わった。

昨年好評だった千本のロウソクの光で地上に天の川を演出する企画の他、「夜の博物館体験」では照明を落とした常設展への来館者の案内、常設展示室の竪穴住居の復元模型で貫頭衣姿の弥生人に扮した寸劇、「源氏物語図屏風」に見る恋愛事情の解説などをおこなった。二日間を通じ延べ千三百人が来館した。

この活動は『中日新聞』二〇一一年九月一三日東なごや版で取り上げられた。

(二) ワークショップでござる

日時：二〇一一年十一月二〇日（日）午前一〇時～午後三時半

会場：名古屋市博物館

名古屋市博物館、九州国立博物館との共催。両博物館との連携プログラム。「はくぶつかんまつり」後に発足した名古屋市博物館サポーターのメンバーである本学学生と九州国立博物館の学生ボランティアとの共同ワークショップ。子どもから大人まで地域の人々に博物館で文化や歴史を楽しんでもらい、博物館という空間を身近に感じてもらうことをめざした。「ワークショップでござる」は、名古屋市博物館で開催中だった特別展「狂言でござる」にちなんだ名称。

参加者は全体で約二四五名（絞り染め約四五名、はにわに色づけ約七〇名、ぶらばんづくり約一三〇名）で、年齢層は幼児から高齢者まで幅広かった。

この活動においては、準備段階から名古屋市博物館と九州国立博物館と綿密な連携をはかった。市民と共生する博物館をテーマとする九州国立博物館での打合わせでは（二〇一一年八月二十七日、二十八日）、同館を実際に学生が見学し、職員から運営方法などのインストラクションを受け、そのノウハウを吸収した（詳細は後述）。

① 絞りに染められた名古屋の伝統工芸有松絞りの技法を学生が学び、参加者に伝授。オリジナルのハンカチを製作した。

② はにわに色づけ—紙粘土で製作した埴輪の模型に絵の具で彩色し、オリジナルの古墳に飾る。四種類の模型（馬、水鳥、しゃちほこ、踊る人）を用意した（本誌表紙参照）。

③ ぶらばんづくり—プラスチック製の板に描かれた絵に彩色し、オリジナルのストラップを製作。絵のモチーフは約十種類用意。狂言面「武悪」は名古屋博物館の展覧会「狂言でござる」から「はらのむし」シリーズは九州国立博物館の収蔵品から、というように両博物館にちなんだモチーフ。

(三)講演会・シンポジウム

日時：二〇一一年一月二六日

(土) 午後一時半～五時

会場：名古屋市博物館講堂

名古屋博物館との共催。

藤原徹東北芸術工科大学教授の講演会「文化財を守る―東日本大震災の教訓から―」、シンポジウム「文化財を守る―東海大震災に備えるには―」(パネリスト 藤原教授、瀬川貴文名古屋博物館学芸員、山田明本学人間文化研究科教授)を開催。

三. 研究成果

本研究プロジェクトは、二〇〇九年度から始まった名古屋市立大学と名古屋博物館との連携事業における学生を主体とした活動を研究として位置付け、今後の名古屋市立大学の地域連携に寄与すべく立ち上げたものであった。特別研究奨励費および後援会からの助成も受けられたので、先述の活動を充実させることができた。その結果、博物館来場者に市立大学と市博物館との連携を認知させ、特に「はくぶつかんまつまつり」のナイトミュージアムは夏の風物詩として定着させることができた。一方で、博物館を大学生

に身近な存在として認識させるための方法の追究においては、イベントに参加するボランティア学生は着実に増やせたが、来場者としての増加にはなおいっそうの学生の行動に関する調査・研究が必要であることが明らかになった。

(付記)

八月二七日と二八日におこなった九州国立博物館見学・打ち合わせと福岡市内博物館・美術館視察について報告する。

八月二七日午後一時半に、「社会調査実習」メンバー八名と研究協力者一名および阪井が、九州国立博物館を訪問。まず特別展「よみがえる国宝」展と常設展示、ならびに館内無料体験コーナー「あじっば」を二時間かけて見学。ワークショップの実際について、交流課職員からレクチャーを受けた。その後、館長室に移動し、三輪嘉六館長に全員でご挨拶。約一五分の懇談の後、交流科職員およびボランティア学生部のメンバーと、一月二〇日に合同で開催するワークショップについてのミーティングをおこなった。ここで、ワークショップの具体的なメニューを、現物を見ながら検討、九博と市大・市博との役割分担な

どを確認した。

ミーティング後、三輪館長の案内で、九博のバックヤード、耐震・免震構造を見学した。これは、一月二六日の講演会・シンポジウム「文化財を守る」について阪井が館長に助言を求めたのに対し、特別にはからってくださったものであった。

その後、太宰府天満宮に参詣、夜は交流科職員・ボランティア学生部のメンバーと親睦会を持った。このミーティング・親睦会で、九博のボランティア組織とその運営方法を直接学び、大いに刺激となり、今後の市大と市博との連携

に向け参考となった。翌日は、二、三人ずつのグループに分かれ、九博再訪あるいは福岡市立博物館・福岡アジア美術館・福岡市美術館・鴻臚館跡展示館・福岡タワー・太宰府遺跡などを見学した。この機会に、福岡・太宰府の遺跡や博物館・美術館を活かしたまちづくりの実際を体感できたのも大きな収穫であった。



プロジェクト研究

「名古屋と観光まちづくりに関する人文社会科学分野からの学際的研究」報告

名古屋市立大学大学院人間文化研究科

山田 明(やまだ・あきら)

二〇一〇年一二月に策定された

名古屋市観光戦略ビジョンは、基本理念として「飛躍する名古屋の観光」世界的な交流拠点都市をめざして」を提起している。基本理念の実現に向け、一、名古屋らしい魅力の創出、二、観光プロモーションの推進、三、おもてなしの充実、四、広域観光の推進、という四つの視点をあげる。一の視点では「歴史都市・名古屋の面白さを味わう『歴史観光』と現代の名古屋の面白さを体感する『都市観光』の二つの観光を柱に、名古屋らしい本物の魅力に出会う観光を創出し、集客力の向上」を図るとしている。

私たちは二〇〇六年に「名古屋と観光」共同研究プロジェクトを立ち上げた。当初のねらいは、総合科目「名古屋と観光」の講義を準備するために調査研究をすすめ、名古屋のまちづくりと観光について問題意識を共有することにあった。共同研究プロジェクトは本学特別奨励研究に採択され、

二〇〇七年三月には『名古屋の歴史・文化・まちづくりと観光』を

刊行し、講義テキストとして活用した。また、本プロジェクトの研究代表者が名古屋市観光戦略研究会座長を務め、先に紹介した観光戦略ビジョンの策定に関与した。総合科目「名古屋と観光」は、講義開始から六年が経過する。講義は観光戦略ビジョンが提起する「歴史観光」と「都市観光」という二つの観光が軸になって展開されている。

この共同研究プロジェクト報告では、二〇一一年度の講義の概要を紹介したい。一五回の講義は下記のとおりでである。

- 一．プロローグ・名古屋のことば
山田 明・成田徹男
- 二．名古屋の歴史
吉田一彦
- 三．〃〃
- 四．名古屋の文化
谷口幸代
- 五．〃〃
- 六．名古屋のことば
成田徹男
- 七．明治・大正・昭和 絵葉書にみ

る名古屋の観光

名古屋市博物館・井上義博学芸員
八．名古屋の伝統 阪井芳貴

九．〃〃

一〇．映像から名古屋を考える

山田 明
一一．観光からみた名古屋 須田 寛

一二．まちづくりにつながる「新しい観光」
須田 寛

一三．名古屋の観光まちづくり
山田 明

一四．〃〃

一五．フリーディスカッション

今年度の特徴としては、名古屋博物館の井上義博学芸員による「明治・大正・昭和 絵葉書にみる名古屋の観光」をテーマにした特別講義が行われたことである。阪井研究所長を中心に名古屋博物館との連携事業が推進されているが、その成果を講義に生かすことができた。井上学芸員は『名古屋絵はがき物語』（風媒社、

二〇〇九年）の著者であり、名古屋の歴史・民俗に造詣が深い。明治の時代からの多数の絵葉書により、名古屋のまちづくりと観光をビジュアルで紹介した講義は好評であった。

それとJR東海相談役の須田寛先生の講義についても述べておきたい。講義開始から六年連続の講義であるが、毎回聞いていても示唆を富むことが多く、今回も受講生から大好評であった。熱田神宮をはじめとした名古屋の歴史から始まって、今回はリニア中央新幹線まで、いつもながら多岐にわたる話題満載である。最終回の「フリーディスカッション」で配布した資料に、読売新聞二〇一一年四月二二日付に掲載された須田先生の発言を紹介しておいた。東日本大震災で観光どころでないとの質問に対して、須田先生は次のように答えている。「観光は、派手で大騒ぎするだけのものという考えは誤りだ。観光は『地域の優れたものを心をこめて見る』ことで、人々の交流を促進する文化活動だ。」

須田先生が毎回の講義で強調される「観光のこころ」を胸にして、名古屋の観光の調査研究と講義を今後ますますしていきたい。

プロジェクト研究

「フロイトと独文学」

名古屋市立大学大学院人間文化研究所 土屋勝彦(つちや・まさひこ)

研究構成員

土屋勝彦、鈴木國文(名古屋大学医学部教授、精神病理学)、中川佳英(富山県立大学教授)、山口庸子(名古屋大学准教授) 亀井一(大阪教育大学准教授)、河津邦喜(東海地区諸大学非常勤講師、フランス現代思想)、須藤勲、山尾涼、福岡麻子、鶴田涼子(以上、すべて東海地区諸大学非常勤講師)

研究概要

メンバーの半数以上はすでに「ドイツ現代文化研究会」において下記の題目にて報告し、本誌前号の研究報告でその概要を紹介した。(『人間文化研究所年報』六号参照)

山尾 涼

「フロイト『ある幻想の未来』について」

須藤 勲

「カフカの『訴訟』における「書かれたもの」と「書くこと」」

鶴田涼子

「小説の起源としての(家族小説)とメルヒェン―フロイトの論考 Der Familienroman der Neurotiker (1909年)を手がかりとして」

福岡麻子

「イエリネクにおける過去の問題の仕方―フロイトの「隠蔽記憶」に照らして」

中川佳英氏

「ベンヤミン『親和力論』(1925)とフロイト」

したがって今回は、右記以外のメンバーによる報告概要を紹介する。

鈴木國文

「フロイト著作の三つの側面とラカン」

①フロイトの年代別の思考の傾向 ②メタサイコロジ ③神経症理論 ④文化論の位置づけ ⑤フロイト理論のその後の伝わり方

河津邦喜

「カフカ論におけるジル・ドゥルーズのフロイト批判―日本における文学研究とフロイト」

まず広範囲の観点からフロイトの日本における受容を跡付けその意味を探る。フロイトが戦後日本に与えた影響として、西洋人と日本人との精神的相違を説明する図式を提供し、文学研究において柄谷行人、浅田彰、蓮見重彦たちが明治以後の日本文学に対して「エディプス期に母なる自然を喪失し父なる超越的法の前に挫折する」というある種のトラウマ体験によってこそ個人は主体化する」というフロイト理論を援用した。フロイトの『性欲論』は、「人間は本能が壊れており、幼児期において『多形倒錯』しており、社会化により異性愛への囲い込まれるだけで、無意識の領域に残り続け、ふいに表出する」という理論を考えさせ、現代思想や文学芸術に影響を与えた。ドゥルーズは多形倒錯や祝祭的革命によるアナキーな状態は、暗黒ではなく、分子レベルの多様な秩序が交替し続ける状態だとする。フロイトが戦後の日本思想や芸術研究に大きな影響を与えたのは、既存の社会文化へのラディカルな批判になりえたとい

う背景がある。その例をニーチェやフロイトから着想を得た吉本隆明の評論活動に見いだせる。しかし二〇〇〇年代以降そうした「ラディカルな批判」が可能であった時代から、新しい制度を設計する英米系の「政策提言の時代」に入り、ポストモダンの思想家たちも英米系の政治哲学に関心が向かっていく。仲正昌樹や大澤真幸などの「変異」もその文脈で見ることが

できる。いずれにせよフロイト思想の影響力はこうしたポストモダン時代に終わったのではないか。しかしデリダやフーコーの思想が社会変革につながらなかったとしても、ドゥルーズのマイナー文学論や『アンチ・オイディプス論』の多様体論が、ネグリとハートの『マルチチュード』の社会的政策的な提言につながった。日本のフロイト理論援用に欠けていたのは、このドゥルーズ的なラディカリズムと一九九〇年以降の社会状況の変化と和合させるための理論的営為ではなかったか。アメリカでは、すでに心理療法や心理学でもオカルト学と見なされているほど退潮したフロイト理論であるが、それはジョン・ロールズやドゥ

ウォーキンらの現実路線に重要性を見出したからであり、日本でも

危機感からアメリカの政治哲学に向かっていた。

以下詳細は省略するが、議論として、ドゥルーズのいうモル的なレベルと分子的なレベルの差異について、分子的多様体について、領域化と再領域化について、マゾヒズムの社会的止揚とは、など種々の質疑応答がなされた。

亀井 一

「フロイトの『機知論』」(テフストは、『フロイト著作集』第四巻(人文書院) 二二七―四二二頁「機知―その無意識との関係」)

フロイトの「機知論」は、当時彼自ら集めたユダヤ・ジョーク集などをもとに、機知の方法、機知の諸傾向、快感のメカニズムと機知の心因、機知の動因、社会的過程としての機知、機知と夢および無意識との関係、機知および滑稽なものとの諸種という、大きな括りで分析されている一九〇五年の論文であるが、関係する邦訳文献は、サラ・コフマンの『人はなぜ笑うのか?フロイトと機知』(人文書院、一九九八年)くらいしかない。具体的な機知の例を読むだけでも面白いが、最後の結論として提示

論文を書いている。

神田和恵(福井大学非常勤講師)

フロイト「ドストエフスキーと父親殺し」について

本報告では、フロイトがドストエフスキーの人格を詩人、神経症患者、道徳家、罪人という四つの側面から検討し、とりわけ神経症患者としてのドストエフスキーを心因性の癲癇症だと推定し、父親への憎悪と愛情のアンビヴァレントなものが出発点として父親への同一視が起こるとする。その場合、父殺しの願望から罰としての去勢不安、願望放棄という方向や、無意識のうちに願望残存から罪悪感という方向が正常であるのに対して、雌雄両性的性格の場合には、去勢不安から母親への同一視、父親の愛を受ける代償としての去勢が見られ、それを病的とし、ドストエフスキーをこの例だと推論している。そして自我と超自我(罪意識)の関係や、父殺しのモチーフを持つソフォクレス『エディプス王』、シェイクスピア『ハムレット』、ドストエフスキー『カラマーゾフの兄弟』に触れ、犯人と自己との同一視や自己愛を論じ、ドストエフスキーの賭博癖が罪悪感の

代理、自己懲罰の方法であるとし、その例としてツヴァイク『ある婦人の生活からの24時間』を挙げ、幼年時代の自慰衝動の表れだと解釈する。その後の議論としては、家父長制を前提とするエディプスコンプレックスと母性的社会（歴史的には存在しなかったとされる）あるいは母性原理の関係はどうか、一神教と多神教の関係、父殺しの日本文学における例はどうか、等々様々な疑問が出され活発に意見交換した。

山口庸子

「フロイトの『無気味なるもの』」
[1937]

heimlich（慣れ親しんだ、密やかな）と unheimlich（無気味な）の語源的探求に始まり、事例研究としてのホフマンの『砂男』と『悪魔の霊液』の分析に進み、「抑圧されたもの」を「不気味なもの」とらしめる他の用件、体験と文学の区別という項目に分けて、フロイトの当該論文が詳細に紹介された。さらにキットラーの『我らの自我の幻想と文学心理学』の紹介のあと、独自にホフマン『砂男』の作品解釈に進むという構成であり、明確な論理構成と問題意識に

よって啓発され様々な議論を呼び起こした有益な報告であった。

付言すれば、人文書院発行の『フロイト著作集』第三巻には、文化・芸術論が載せられているが、独文学との関連で最もよく取り上げられるのがE.T.A. ホフマンの『砂男』を論じた本論文「無気味なるもの」である。この unheimlich という概念が heimlich という概念の反意語であるばかりでなく、語源的には後者の概念に含まれる両義性をもつ概念であることを指摘し、「無気味なるもの」が実は抑圧された「親しみなれたもの」から由来することを実証している。そこからさらに、『砂男』論に進み、主人公ナターニエルの幼年時の恐ろしい「砂男」体験や、父親の死、弁護士コッペリウス、自動人形オリンピアとの関係、とくにそのドッペルゲンガー（分身）的な諸要素が分析され、恐怖が実は自己抑圧したものから由来することをフロイトは実証している。

以上、各報告概要を述べたが、「フロイトと独文学」を中心としながらも、ラカンへの影響や日本の思想におけるフロイト受容の問題、機知論、ロシア文学など、主題は拡大している。これらの報告

をまとめた論集の出版に関しては、いくつかの出版社と交渉中である。場合によっては、日本学術振興会の研究成果公開促進費に応募することを検討している。